

石綿（アスベスト）による健康被害は忘れたころにやってくる、という恐怖

ウン十年前には、家屋や学校、商業ビルにもアスベストが当たり前のように使われていた。また、日用品にもアスベストが当たり前のように使われていた。

このアスベストの有害性が騒ぎ出されてからも、日本ではアスベストの使用をやめることなくしばらくは使い続けた。

アスベストは日本では石綿と呼ばれているように、鉱物である。その、細くて細長いフィラメントが空气中を漂い、吸い込まれて人間の胚を突き刺す。鉱物であるから、一旦肺に入ってしまうとそこから取り除かれることはない。そして、忘れた頃に肺にガンを発生させる。まさに時限爆弾である。

アスベストを扱っていた工場の退職者に多くの健康被害が認められ社会問題化した。そして、兵庫県においてはその工場の近隣住民にも被害が及んでいることが明らかとなった。

今日の神戸新聞の記事は、そのような背景を受けて実施した検査の結果を報じたものである。アスベストの使用は禁止されたが、この時限爆弾はまだ多くの人々の体内に潜み、爆発の機会を窺っている。

神戸新聞 2020.6.1

# 住民3割、石綿吸引か

## 旧工場付近調査で所見

環境省

アスベスト（石綿）を扱った。石綿被害に対する健康  
 一部地域を対象として環 管理方法を検討するため  
 境省が2015年度に始 の試行調査として実施。  
 めた調査で、19年度まで 対象地域は順次広げてお  
 の5年間で3割を超える り、19年度までにさいた  
 住民に石綿を吸引したと 各市など9都府県の27自治  
 みが1日までに分かつ 体が調べた。施設周辺  
 とが1日までに分かつ に住んでいたことなどを  
 条件に希望者を募り、コ  
 ンピューター断層撮影  
 (CT)やエックス線の  
 検査を受けてもらった。  
 その結果、5年間でC  
 T検査を受診した延べ7  
 926人のうち34%の2  
 672人に石綿が原因で  
 できる「胸膜プラーク」  
 が確認された。環境省は  
 「CTは小さいプラーク  
 を拾うため」と説明して  
 おり、調査対象となった  
 人のうち精密検査で中皮  
 腫や肺がんといった石綿  
 関連疾患と診断された人  
 は58人とどまった。  
 環境省は今後、さらに  
 対象を広げるなどすると  
 している。

石綿（アスベスト）対策について （兵庫県、2019年8月6日）

石綿（アスベスト）による健康対策は、これまで、主に石綿を扱う職業により石綿を吸い込んだ方に特有にみられる症状として、労働者の安全衛生対策を中心として様々な対策が

講じられてきました。

しかしながら、平成 17 年 6 月に一般環境経路による石綿の健康被害の可能性が報道されるなど、これまで石綿を扱う職業とされてきた方々以外も健康被害を受けていた可能性が指摘されています。

これまで、石綿は実用性に優れた鉱物として建築資材、生活用品等、身の回りに多く使用されてきました（現在では、石綿等の製造等は全面禁止されているほか、石綿を吸い込むことを防止するための様々な対策がとられています。）。石綿による健康被害は、石綿を吸い込んでから 30～50 年という非常に長い期間を経て発症することから、本県では長期的な取り組みを今後も進めていくこととしています。

#### 石綿（Wikipedia） 法的規制

日本では 1975 年 9 月に吹き付けアスベストの使用が禁止された。また、2004 年に石綿を 1%以上含む製品の出荷が原則禁止、2006 年には同基準が 0.1%以上へと改定されている。個人でも、1960 年代まで製造されていた電気火鉢の石綿灰を廃棄する際には注意が必要である。なお、労働者の石綿暴露防止の法規制は、2005 年に石綿障害予防規則が新設・施行され、特定化学物質等障害予防規則（当時）から分離された。

現在は、一部（下のポジティブリストの項目参照）の適用除外を除き、一切の製造・輸入・使用・譲渡・提供が禁止されている。

神戸新聞 2005年12月9日

#### 相生市の中央公園 蒸気機関車から石綿 基準値の6倍

相生市那波南本町の中央公園に展示している中国製蒸気機関車の一部から、基準値の6倍近いアスベスト（石綿）が確認され、管理する同市は8日、近く撤去する方針を明らかにした。同日の市会建設常任委員会で報告した。

機関車は、1960年製造の人民型（全長23メートル、122トン）、82年製造の前進型（同26メートル、163トン）の2両。同市によると、両機関車とも円筒形ボイラーの外・内鉄板の間に石綿を含んだ断熱素材が使われていた。総重量に占める含有率は法規制値（1%）を上回る5・7%。同市は、現状では飛散の恐れはないとしているが、鉄の腐敗

の進行や周辺にテニスコート、グラウンドなどがあることも考慮し、撤去を決めた。

両機関車は実際に中国大陸を走行。同市恒例のペーロン競漕（きようそう）が中国発祥であることから、京都市の企業が寄贈し、89年3月に設置された。5月のペーロン祭では運転席を開放していた。

同市は「撤去後は、特徴的な赤車輪を展示するなどの対応を考えたい」としている。（武藤邦生）

在りし日の雄姿



それが悲しい姿に

